

マタイの福音書 1章

マタイの福音書に入りましょう。

マタイは、イエス・キリストから弟子の召命を受ける以前は、カペナウムで収税人をしていました。彼はまた、レビとも呼ばれていました。彼の福音書の初めには、イエス・キリストの系図がアブラハムにまでさかのぼって紹介されています。彼は第1章1節でこう言っています。

アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。(1:1)

主はアブラハムに、「あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。」と、約束しておられました(創世記22:18)。

それによって、地のすべての国々への祝福となるメシアが、アブラハムの子孫から出ることが理解されてきました。そのため、メシアであると自称する者は誰でも、先ず第一に、自分がアブラハムの子孫であることを証明することができなければなりません。神が、その特別な約束をアブラハムに与えておられたからです。

後に、神は、神がダビデの家を建てられ、ダビデの子孫がとこしえにその王座につくことを約束されました(2サムエル7:12)。その約束によって、メシアが彼の家系を通して、つまり彼の系図によって来ることを神が約束されているのを理解しました。

ダビデの後、メシアは「エッサイの根株から出る若枝」として、多くの預言において言及され、また、言うまでもないことですが、メシアは「ダビデの王座につく」ものとしても言及されています。

ですから、自らをメシアと主張しようとする者には、自身がアブラハムの子孫であり、またダビデの子孫でもあることを証明することができる必要があります。

私にとって興味深いことは、ユダヤ人たちがもはや正確な系譜の記録を持っていないことです。そのため、系図の記録によって自らがダビデの子孫であると証明することのできるユダヤ人は、世界中に一人もいないのです。

彼らは代々の記録をすべて失ってしまいました。でも、問題はありません。メシアはすでに来られたからです。マタイはここで、イエスが、アブラハムの子であることと、ダビデの子であること、という必須条件を両方とも満たしていることを指摘し、イエスの系図をダビデまで、またアブラハムにまで辿ろうとします。

ここで皆さんは、「ちょっと待って。これはヨセフの系図じゃないんですか」と言われるかもしれません。「それに、イエスが処女から生まれたのなら、どうしてヨセフの系図をたどることが必要なのか」と。

実際に、16節に至ると、こう書かれています。「ヤコブにマリヤの夫ヨセフが生まれた。キリストと呼ばれるイエスはこのマリヤからお生まれになった。」

ヨセフがイエスの父であったとは書かれていません。そうではなく、ヨセフは「マリヤの夫」であり、「キリストと呼ばれるイエスはこのマリヤからお生まれになった」と書かれています。

新約聖書には、キリストの系図をアダムにまで遡るもう一つ別の系譜があるのは、皆さんもよく知っておられますね。マタイの福音書にある系図と、ルカの福音書にある系図を読んでもと、その両者の系図の間には違いがあるのが分かります。

マタイの系図では、私たちはイエスの血筋をソロモンを通してダビデに辿りますが、ルカの系図を読むと、それはヨセフの系図ではなく、実はマリヤの系図を辿っていることが分かります。マリヤもまた、ダビデとアブラハムの血筋ですが、彼女の場合はダビデの息子、ナタンを通しています。

ですから、マリヤもまたユダ族の者であり、ダビデの子孫であるわけですが、ソロモンの血筋によるのではなく、ダビデの別の息子ナタンの血筋によるのです。

しかし、マタイの福音書では、ヨセフは実際に王家の血筋によるダビデの子孫となっています。ユダ王国の王たちについて読むと、彼らがヨセフの祖先として列挙されていて、ヨセフは実際に王家の血を引くダビデの子孫であったこと、また、そのような者としてイスラエルの王位継承者であったことが分かります。

ところが、ヨセフをイスラエルの王とするには大きな問題があります。なぜなら、彼の血統はイスラエルの王たちを通して遡り、それにはエコヌヤも含まれているからです。主は預言者エレミヤによって、エコヌヤを呪って言われました。「彼の子孫のうちひとりも、ダビデの王座に着いて、栄え、再びユダを治める者はいないからだ。」（エレミヤ 22:30）

そこで、ソロモンによる王家の血筋の者は、エレミヤ書22:30において、エコヌヤの罪のために、王位につくことを禁じられました。

イエスは、マリヤの子であるために、ダビデの王位を継ぐ正統な資格を持っていますが、それは、統治できないように呪われたエコヌヤや、王位につくことのない彼の子孫によるものではありません。

ですから、イエスが、もし、ヨセフの子であったなら、エレミヤ書22章における呪いのために、彼はダビデの王位について統治することはできませんでした。しかし、ナタンを通して、異なる血筋を通してダビデの子となることで、マリヤから出たイエスには王位への権利があるのです。

それでも、ユダヤ国家に関する限りでは、彼らはヨセフを王家の血統の者として認めるはずで、そのため、聖霊によって生まれながらも、ヨセフの長子とみなされたイエスには、王位への権利があることになるわけです。

そのように、主は、二つのものを結び付けられました。どのようにしてそれが起こったかには、かなり興味をそそられるものがあります。

面白いことはいくつかあるのですが、前にも言った通り、最初の17節は読み飛ばしても構いません。これらの名前を読むのは、それらをよく知らない人にとっては、難儀なことになりえるし、それらの名前を正しく発音しようとするのにばかり気をとられ、あまり意味のないものになってしまうからです。

女性の名前が系図に示されることは滅多になかったのですが、ヨセフの系図を辿ると、4人の女性が言及されています。私が面白いと思うのは、言及された4名の女性たちは、一人を除くと、あまり貞淑なタイプの女性ではなかったからです。

一番初めに言及されている女性は、タマルです。第3節に出てきます。

ユダに、タマルによってパレスとザラが生まれ、 (1:3)

ユダには、タマルを娶った息子がいましたが、その息子は子のいないうちに死んでしまいました。そこで、彼の弟が、その文化で容認されていた通り、タマルを自分の妻として迎えました。ところが、彼もまた、子のいないうちに死んでしまいます。

ユダにはもう一人息子がいました。そして、その息子には、タマルと結婚して、子孫、つまり後継ぎを起こす義務がありました。

しかし、ユダはもう二人の息子を亡くしていました。それが彼女の料理のせいだったのかどうか分かりませんが、とにかく、ユダはどうにも疑いを持ってしまって、三番目の息子に彼女を娶らせる気にならず、言い逃れをして彼女を待たせていました。

彼は言いました。「ああ、あの子はまだ若くて、未熟だから。」そして彼はごまかし続けましたが、そのうち、ユダには三番目の息子をタマルと結婚させる気が全くないことが、タマルにもはっきりと分かってきました。

そこで彼女は遊女を装って、道に座りました。そしてユダは、そこを通りかかった時に彼女を誘い、彼女はそれを受けました。

彼女が「私に何をくださいますか」と言うと、彼は「群れの中から子やぎを送ろう」と言いました。彼女が「でも、今お持ちではないでしょう」と言うと、彼は「では、私の指輪を保証にして、子やぎを送り返そう」と言いました。

そこでユダはタマルのところに入りました。彼女はベールで顔を覆っていたので、ユダは彼女がタマルであることに気づかず、彼女はユダによって妊娠しました。

翌日、子やぎを連れて僕が戻って来ましたが、その娘はいませんでした。そこで彼はその辺りの人たちに、「ここに座っていた遊女はどこにいますか」と尋ねました。

彼らは「ここには遊女はいたことがない」と言いました。そこで彼はユダのもとに戻って来て言いました。「あの女は見つかりませんでしたよ。だからまだ子やぎも私が預かったままです。」ユダは、「仕方ない、放っておこう」と言いました。

「あなたの嫁のタマルが妊娠している」との言葉がユダの耳に届くと、彼は「彼女を殺せ」と言いました。するとタマルは、あの指輪を送って言いました。「この指輪の持ち主によって、私は身ごもったのです。」

ユダはそうしてはめられました。タマルがダビデ王の系図に登場すること、神がこのような都合の悪い状況を抱えたタマルを選ばれたというのは、面白いと思いませんか。

二人目はラハブです。イスラエルの民が、神が彼らに約束してくださった土地に入ろうとしていた時に、彼らが最初に来た町はエリコでした。彼らはエリコの中に斥候を送りこみ、その防御やら何やらを偵察させました。

そしてエリコの住民たちは、イスラエルの斥候が自分たちの町の中に入っていると気づくと、彼らを見つけ出して殺そうとしました。しかし、遊女ラハブは、彼らを屋上の亜麻の茎の下に隠しました。

それから彼女は壁伝いに彼らを吊り降ろし、「あなたがたがこの町を取るとき、どうか私と私の家族の命を助けてください」と頼みました。そこで彼らは言いました。「この赤いひもを結び付けておきなさい。そうすれば、私たちが町を奪う時、あなたの家の中にいる人たちは全員守られます。」

そうしてエリコの町は攻略されましたが、彼らは斥候をかくまったラハブを尊重し、彼女の家の中にいた者たちは殺されることなく、命を助けられました。（ヨシュア 2:1-15）

ラハブはその後、ユダ族のサルモンと結婚し、ボアズとして知られるボアズを生みました。このボアズは、言うまでもなく、モアブ人ルツと結婚したボアズです。そして、ルツが、言及されている三人目の女性です。

ラハブはイスラエルの血筋ではなく、エリコの出身で、カナン人であり、遊女でした。しかし、主は彼女もまた系図に加えられました。

次に名前が挙げられているのはルツです。彼女はモアブ人でしたが、モアブ人は神のとしえの呪いの下にありました。モアブ人は、10代目の世代まで、決して主の神殿の中に入って来ることができませんでした。神がモアブを呪われたからです。

それでも、神の恵みによって、ルツはボアズの妻となりました。その子はオベデ、オベデの子がエッサイ、エッサイの子がダビデ王でした。こうして神はモアブ人女性ルツを系図に加えられました。

そして、四番目に挙げられている女性については、名前は触れられていませんが、私たちにはそれが誰であるのか分かっています。

ウリヤの妻 (1:6)

というわけで、バテシェバが記録に入れられた四人目の女性です。彼女は、ダビデと不法な関係を持ったあの女性です。彼女の夫は、その後、ダビデの陰謀によって殺され、彼女はダビデの妻となりました。

彼女に、ソロモンが生まれ、彼はイスラエルの王となり、その血統はソロモンを通して繋がっています。

主は、神の恵みを示すために、これら四人の女性をヨセフの血統の系図に加えられました。私たちの誰でもが、自分の失敗を通して、神の救いのご計画と人間へのご愛を、自分のものとする事ができるためにです。誰一人として、除外されてはいません。

神は、人生を台無しにしてしまった人たちを、すでにご自身のご計画の中に含めておられます。それは個人的に大失敗をしてしまった人たちであり、人生に不道德のしみがついてしまっていた人たちですが、それでも神はご自身の総合的な計画に、彼らを用いられました。

そのために、私たちは勇気づけられます。私たちもまたしみがあり、失敗をした者たちですが、それでも神は私たちをご自身のご計画のために用いることができになるのです。ですから、キリストに至る系図の中に神が含まれた人たちを見ると、私は胸がはずんできます。

マタイは世代を分けています。

それで、アブラハムからダビデまでの代が全部で十四代、ダビデからバビロン移住までが十四代、バビロン移住からキリストまでが十四代になる。(1:17)

けれども、三組ある七つの対に収めるために、マタイがいくつかの名前を省いているのは、かなり明白です。彼はわざといくつかの名前を除外しました。

除外された名前の中には、かなりはっきりと分かりますが、8節にアハズヤがあります。歴代誌の記録を見ると、アハズヤ、ヨアシュ、アマツヤが省かれているのが分かります。

アハズヤ、ヨアシュ、アマツヤというのは、どういう人たちだったのでしょうか。彼らはアタリヤの息子たちでした。彼女は北王国の悪しき王と王女であったアハブとイゼベルの娘でした。アハブとイゼベルの罪が、実際に北王国の運命を確定したのでした。

アタリヤは王家の血を引くダビデの子孫を皆殺しにしようとしたのですが、そのうちの一人が逃れ、当然ながら、後に王となりました。しかし、アタリヤの子孫はこの記録から外されており、私はマタイが故意にそうしたものと確信しています。

他にも省略されてはいますが、マタイの目的はそれを14代に設定することにあり、それは確かに意図的なものでした。

私には、マタイがただ間違いを犯したとは思えません。そうではなく、それは、系図を書くに当たって、マタイが意図的に省略したものでした。マタイには、私たちと同じ旧約聖書の記録がありました。

そして、これらの名前がそこに入ることを十分によく承知していましたが、彼はわざとそれらを省略したのです。もしも皆さんが省略について、また省略された人たちについての学びをしたければ、なぜマタイがこれらの名前を省略したかという理由を見つけることができるはずだと思います。

16節にこう書かれています。

**ヤコブにマリヤの夫ヨセフが生まれた。キリストと呼ばれるイエスはこのマリヤからお生まれになった。
(1:16)**

これはちょっとした推移のための一節です。これが必要なのは、キリストがアブラハムから、またダビデから出ていることを示すために、マタイがアブラハムに遡る系図を与えているからです。しかしながら、イエス・キリストはヨセフによって生まれたものではありませんでした。彼はそれを説明しようとするところです。

18節です。

イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。(1:18)

ルカの福音書は、御使いガブリエルがマリヤのもとに来て、彼女が「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」(ルカ 1:34)と言った時に、ガブリエルが彼女にその過程を知らせた様子を、もう少し詳しく教えてくれています。

その御使いは、彼女にその子が生まれる過程を告げました。そのことについては、ルカの福音書を学ぶ際に、学ぶことにします。

ここで私たちが理解する必要があるのは、その文化においては、男女に三つの関係があったことです。まず最初が約束(許婚)で、次は婚約、三つ目が婚姻です。

許婚は、その子どもの人生においていつでも起こり得ます。結婚は申し合わせによって決められていたからです。

あなたの両親に友達がいて、自分たちに息子が生まれたのと同じくらいの時期に、その友人に娘が生まれたとしたら、「あなたの娘を私たちの息子に嫁がせましょう」と言う話になることがありました。

そして彼らは、あなたの娘を私の息子に嫁がせるという取り決めをします。あなたの娘が2歳で私の息子が3歳だったりするかもしれませんが、私たちはこの取り決めをしたのですから、それが許婚の成立となるんです。

それで幼い2歳の女の子と、3歳の男の子が許婚(いいなづけ)となっていることになります。だから、幼稚園に行って、「君のガールフレンドは誰?」となると、「ああ、ぼくはあの子と許婚の関係なんだ」と言うんです。

そんなわけで、結婚の取り決めは人生の非常に早い時期に起こり得ます。親の取り決めによって結婚が決められていたからです。

そして彼らが結婚することのできる年齢になると、女の子が結婚するのはたいてい10代の初期、15歳、16歳くらいでしたが、彼らは一年間、婚約の期間を過ごします。その間、彼らは恋愛関係ということ言えば、互いのために分け隔てられません。

それは、私たちが今日言うところの婚約に近いもので、彼らは親の取り決めを受け入れ、互いを受け入れ、結婚の準備と計画のために一年間、互いのために自らを分け隔てるのです。

婚約期間中は、ある意味で、あなたは結婚していると見なされていました。というのも、婚約を破棄するには、実際に、離婚状が必要でした。

あなたがたは結婚していると見なされていましたが、それは、肉体関係なしに、互いに献身して過ごす一年間の婚約期間でした。そして、それは離婚によらなければ、破棄することのできないものでした。

一年間の婚約期間の後、結婚の儀、つまり婚姻そのものがあります。結婚式の夜、父親は娘が処女であった証拠を取り、彼女の処女性についていつか疑いが持たれるかもしれない時のためにそれを取っておきました。

もしも後になってその男が「いやあ、私たちが結婚した時、彼女は処女じゃなかったんです」と言って彼女を離婚しようとしたら、その父親は彼女が処女であった証拠を持ち出してくることができ、このシラミのような夫を、偽って妻を非難したかどで起訴することもできました。

ですから、それは娘を守るために、彼女の処女性のしるしとして、父親が取っておいたもので、結婚式の夜、婚姻の儀や披露宴などがすべて終わった後で、彼は娘が処女であった証拠をとっておいたのです。

それで、まず最初に許婚、二つ目に婚約、三つ目に婚姻がありました。そして、ヨセフとマリヤが婚約し、肉体関係を持たずに互いに献身していたこの期間に、突然マリヤが懐妊し、非常に難しい問題が起こりました。

ユダヤの法の下では、これは不貞、姦淫に当たりました。彼らは婚約期間にあったからです。そしてユダヤの法によれば、ヨセフを裏切ったことで、彼女は石で打ち殺されてもよいことになっていました。

そしてこれがヨセフが直面した問題でした。マリヤは間違いなく、ことさらに美しい人物でした。必ずしも容姿が美しかったのではなく、霊的に美しかったのです。

マリヤは、非常に純真で、非常に正しい少女だったので、神は、ご自分の息子が地に誕生するために用いる器として、他の誰よりも彼女を選ばれました。

神は彼女に大変大きな名誉を与えられたので、その時からすべての人々が彼女のことを「恵まれた人」と呼ぶようになります。だから、私たちは「イエスの祝福された母」と呼ぶのです。

彼女の霊性の深さは、ルカの福音書で、彼女がいとこのエリサベツに会って、二人が主について、またその息子たちについて体験したことを語り合った時の状況に、よく映し出されています。ヨハネはエリサベツの胎内に、そしてイエスはマリヤの胎内にいました。

彼女たちが自分たちの妊娠の体験や、それにまつわる奇跡のことなどを語り合い始めると、マリヤは堰を切ったように、ルカの福音書に記録されている壮麗な『マニフィカト』を始めました。「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。主はこの卑しいはしのために目を留めてくださったからです。」（ルカ 1:46）

彼女は、神への輝かしい賛美のほとばしりを続けます。それは、霊にあって美しく、この大きな名誉のために神によって選ばれたマリヤと主との間にあった関係の深さを表しています。

ところが、ヨセフは混乱していました。彼は彼女を愛していました。彼にはどうすればいいのかわかりませんでした。

彼は、自分がその子に責任がないと宣言することによって、彼女を公けに辱めるという考えに耐えることができませんでした。

それに、怒った群集によって彼女が石打ちにされるのを見ることなど、彼にはできませんでした。そこで彼は考えました。「そうだな。彼女をどこかに送り出して、こっそり去らせることができるかもしれない。そうしたら、少なくとも彼女の命は助かるだろう。」ヨセフは心の中でそんなことを熟考していましたが、次のように書かれていることに注目してください。

夫のヨセフは正しい人であって、 (1:19)

ヨセフはよく間抜け者のような感じで描かれますが、彼もまた神と繋がっていた人物であり、主は彼に語られたのでした。

明らかに、ヨセフはイエスの人生のかなり早い時期に亡くなっています。なぜなら、エジプトから戻って来た後、彼のことがただ一度だけ言及されているのはヨハネの福音書6:42です。「これは大工ヨセフの息子、イエスではないか」

そして間違いなく、彼は一時の間ナザレにいましたが、イエスがその公生涯を始めた時には、ヨセフはすでに舞台からいなくなっていました。

夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現われて言った。「ダビデの子ヨセフ。(1:19-20)

私たちは、彼がダビデの血筋であることはもう見てきました。

恐れないであなたの妻マリヤを迎えなさい。(1:20)

彼らはまだ結婚はしていませんでしたが、婚約していたために、彼女は彼の妻であると見なされていました。

その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」 (1:20-21)

それがイエス（イエシュア）の意味を説明するものです。それは、ヤハウエは救いという意味です。それは私たちがヨシュアと呼ぶもののヘブル語で、イエシュアといい、「エホバ、あるいはヤハウエ、は救い」という意味です。

その名をヨシュアとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださるからです。ですから、彼の名は、救い主としての主の使命を暗示しているのです。

このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。(1:22)

マタイが、預言者たちの言葉は実際に神の靈感によるものであると認めていることに注目してください。新約聖書が最初から最後まで一貫して認めているのは、聖書が神の靈感によるものであるということです。「聖書はすべて、神の靈感によるもので、」(2テモテ 3:16)とある通りです。

ペテロはダビデの言葉に言及して、「聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことばは」(使徒 1:16)と仰いました。

新約聖書は、聖書の筆記の背後には神がおられること、現実には神がみことばの神聖なる著者であられることを認め、そう教えています。ですから、ここでもまた、主に関して預言者によって語られたことが成就するためである、と確認されています。

使徒パウロが、「私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです」と言ったのと同様です。

預言者イザヤは第7章で告げました。「見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」(イザヤ 7:14)そして、それは「神が私たちとともにおられる」と解釈されます。

現代訳について、また私が現代訳に対して持っている問題点について話をしましたが、それはイエス・キリストの神性を排除しようとするもので、ここは、私が改訂版の聖書を信用せず、またそれを嫌悪している部分の一つなんです。

イザヤが預言をするイザヤ書のこの預言の部分を読みましょう。「主は、アハズに告げてこう仰せられた。しるしを求めよ。そうすればしるしを与えよう。」

するとアハズは仰いました。「私は求めません。」

そこでその預言者は仰いました。「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」(イザヤ 7:14) その名は、神は私たちと共におられるという意味です。

ここで、主はメシアが処女から生まれると約束しておられます。

ところが、ゲゼーニウスという学者がいて、この人は辞書を執筆し、その「アルマ」というヘブル語を「若い乙女」と訳しました。彼は、パリサイ人たちによく似た聖書の権威者たちから認められていました。それは自分で自分を聖書の権威者とした人たちです。彼らは、自分たち以外には誰も聖書を理解したり解釈したりできる者はいないと信じています。ちょうど律法学者やパリサイ人たちと同じようにです。

そしてイエスには、彼らについて言うべきことがたくさんありました。今は現代版の律法学者たちやパリサイ人たちがいます。彼らは、自分たちの小さな知的グループの中に座って、かわいそうな私たち無知な輩を見下しています。

ゲセーニウスは辞書を執筆して「アルマ」を「若い乙女」と訳しました。

そしてこれらの訳者たちは、聖書の内容を薄めたがっているのです、当然、ゲセーニウスの「若い乙女」を選びます。

彼らはこれをこう訳します。「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。若い乙女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」

まず第一に、若い女の子が懐妊するというのは、どういうしるしなのか教えてください。それは何のしるしでもありません。それは常時起こっていることで、特別なことでも変わったことでもありません。

それが「処女」と訳されるのが聖霊の意図であったことは明らかで、旧約聖書中の他の場所で使われている「アルマ」はすべて、「処女」を指しています。

しかし、この学者はそれを「若い乙女」と訳した理由として、「私は奇跡を信じない。若い処女が子を産むというのは奇跡になるから、私はそれを受け付けません」と断言しました。

それで彼は「処女」の代わりに、それを「若い乙女」と訳しました。私はそのような学識には全く敬意を持っていません。それはすでに神が実際には存在しないということを前提としているからです。

彼らは、神が、自ら宇宙に設定した自然の法則を超越することができないと仮定しました。私はそのような愚かさは全面的に、徹底的に拒絶しますし、それを受け入れる必要がないことを神に感謝します。

イエスが生まれる200年ほど前に、70人の学者たちが、民が理解のできる言語で書かれた聖典があるべきだと感じました。ヘブル語はバビロン捕囚の期間中にほとんど失われてしまったからです。

バビロンから戻って来た後は、大半の人々はヘブル語を話しませんでした。それは、当時の聖書学者たちのためだけの言語となっていました。

人々は、学者たちが聖書を教えてくれるのに頼らなければなりません。もはや彼ら自身の言語で書かれた聖書がなかったからです。

そしてアレクサンドロス大王の影響と、アレクサンドロス大王がその領域を征服した際のギリシャの影響によって、その人たちは、ヘブル語の聖書、つまり旧約聖書を、人々が自分で聖書を読むことができるように、ギリシャ語に翻訳することにしました。

この翻訳作業に従事した学者たちが70人いたことから、それを七十人訳聖書と名付けました。

ですから、七十人訳聖書というのは、人々が再び自分たちで読んで理解できる言語で書かれた聖書を持つために、キリストが誕生する約200年前にギリシャ語に訳されたものなのです。

興味深いことに、マリヤが処女としてイエスを出産するという体験をした200年前に、これらのギリシャ人およびヘブル人の学者たちは、イザヤの預言を理解して、その「アルマ」というヘブル語をギリシャ語に翻訳する際に、「処女」としてのみ使われるギリシャ語を使用しました。

そしてもちろん、マタイはここで七十人訳聖書の訳を、自らのギリシャ語にそのまま用いています。

そして新約聖書が、旧約聖書は主の靈感によるものだと認めているように、イザヤがこれを語ったのも、主の靈感によるもので、それを「処女」と訳しています。人がイザヤ書にあるその聖句を「若い乙女」として「若い乙女がみごもる」と訳すのは、聖書を改ざんすることであり、冒瀆的なことです。

これは、私が現代訳に対して何百と抱いている反論の一つに過ぎません。だから、私は、主がやっと、多数派本文、および神が宣言された根本真理に忠実な新しい訳本を私たちに与えてくださったことを、本当に嬉しく思います。少し余談になりましたが、私はこのことを喜んでいんです。

ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。(1:24-25)

カトリック教会で発展した、マリヤの永遠の処女性なる独自の教義は、全くのたわ言です。それは、マリヤを神の位にまで引き上げようとした人間の創案です。

ここではっきりしているのは、「子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく」ということで、明らかに、その後、彼はマリヤと通常の夫婦関係を持ったのです。そうでなければ、マリヤに生まれた他の息子たちや娘たちもまた処女から生まれたことになり、それでは話がすっかり混乱してしまいます。

マルコの福音書はイエスの兄弟たちの名前を挙げています。ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンで、彼の妹たちも言及されています。ですから、マリヤの永遠の処女性を宣言することは、聖書的真理ではありません。

それは、多くの教義と同様、聖書的根拠なしに、教会によって作られた教義です。気をつけなければなりません。